祭祀道具の流れ着いた地

尾上遺跡

東浅井郡湖北町（現長浜市）尾上の琵琶湖岸に立つと、沖合には竹生島が、対岸には琵琶湖に大きく突き出た葛籠尾崎が目前に見えます。湖岸からほど近い湖中に水没した浜堤（砂丘状の細長い地形の高まり）にはヨシや木々が生い茂っており、なかなか風情のある場所で、私はここから見る琵琶湖の風景が気に入っています。今回お話しする「尾上遺跡」は目の前にこのような風景の広がる遺跡で、陸上ではなく湖岸からごく浅い湖底に立地します。

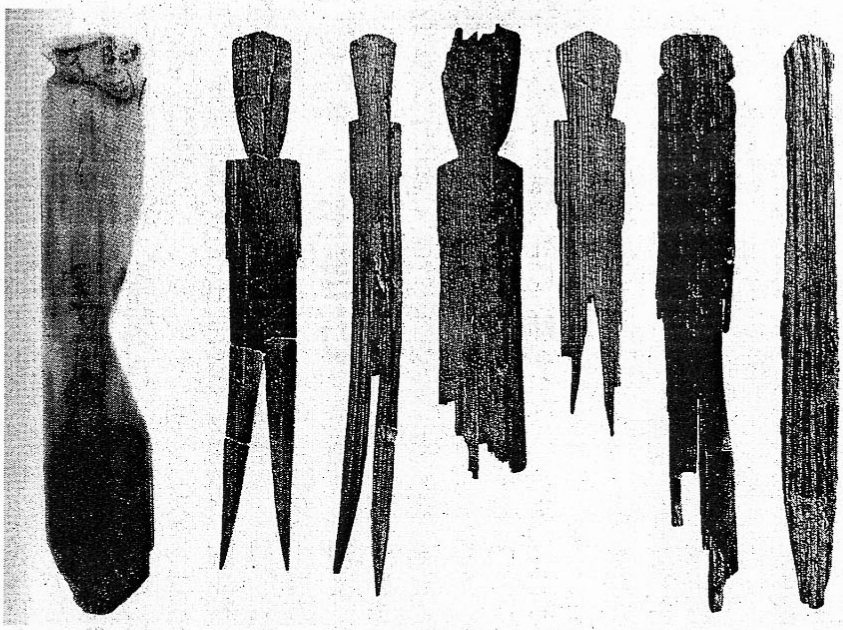
尾上遺跡では、砂の層の中からまとまって斎串・人形・馬形が出土しました。これらはいずれも長さ10～15㌢程度の板状の木製品ですが、何のためのものなのでしょうか。結論から言えば、これらの遺物は祭祀に使われる道具なのです。人形と馬形は、文字通り人や馬の形をした板状の製品で、目鼻などを墨描きしているものが多く見られます。斎串は両端を山形に削ったり、側辺に切り掛けを加えたりした板状の製品です。聖域を画したり、供物を標示するものと考えられています。

では、これらの道具を使った祭祀はどのような祭りだったのでしょうか。人形を例に見てみましょう。人形は、現在も禊祓の際に紙で作った人形に自分の名前や年齢を書き、それに息を吹きかけて罪穢や禍を移す「祓具」として用いられています。平安時代の『延喜式』には、金・銀・鉄・木のものが作られたことが記されています。平安時代、朝廷では毎月天皇自ら罪や穢をなすりつけた「ひとがた」を七瀬に出て水に流す祓の行事（七瀬祓）が行われていたのです。このことから、尾上遺跡の人形も、人々の罪穢や禍を移して水に流す祭祀に使われていたと考えられます。

一方、馬形については、実物の馬が祭礼の際の祓料として使われる記事が多くの文書に残されていますので、馬形がその代わりに使われたのでしょう。また、雨乞いに関係する祭具ともいわれています。

そこでもう一度、尾上遺跡の立地を見ると、ここが余呉川河口の三角州に位置することが注目されます。おそらくは尾上遺跡からそう遠くない余呉川の上流で、斎串を立てて聖域を画し「禊祓」の祭礼を行い、人形とともに使われた祭具を水に流した結果、尾上の湖岸（余呉川の河口部）に流れ着いたと考えられるのです。

先に見たように、罪や穢れを「祓具」に移して自分の身を清めるという祭祀は、平安時代の昔も今も変わらずに行われています。今年も六月に夏越祓が各神社で行われました。筆者も近くの神社に紙の人形を納め、水無月（小豆の粒の入ったういろうのような菓子で、夏越祓の時期に食べる習慣が京都ではある）を食べながら、この原稿を書くべく頭を悩ませていたのでした。



人形と馬形（左端）、斎串。人形には墨で目鼻の表現が、馬形には顔とタテガミの表現以外に「黒毛馬」の墨書がある（『琵琶湖北東部の湖底・湖岸遺跡』＝平成15年3月滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会＝より）。

（財団法人滋賀県文化財保護協会　岩橋隆浩）